

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## Wonderful encounters

|       |                                                                                                           |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2022-12-20<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 新野, 緑<br>メールアドレス:<br>所属:         |
| URL   | <a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2647">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2647</a> |

## 出会いの妙

新野 緑

定年を迎えた今振り返ってみると、神戸市外国語大学での35年は実にあっという間だった。着任前に大阪大学で11ヶ月助手をしてはいたが、本当の意味で独り立ちの専任教員として勤めることになったのは、神戸市外大が初めてで、大学教員としての私の経験はもっぱらここで形作られたと言っていい。着任時の外大は、90名ほどの教員の内、私が全学で二人目、英米学科では初めての女性教員ということで、市から派遣された職員もほとんどが男性だった。大学院入試の面接においてでさえ、講座の教授から現実問題として「女は就職がないよ」と大っぴらに言われる時代だったから、ディケンズの専門家をという学科の希望があったとはいえ、着任できたのは本当に幸運だったと思う。女性の教職員がほとんどいない中で、大学も同僚の先生方もその扱いに戸惑われたに違いないが、健康診断の時、レントゲン室に男女一緒に入れられたのには閉口した。今なら考えられないことだろうが、当時はそうしたことへの配慮さえ思い及ばない時代だったのだ。

外大の教員の中にはかつて大学紛争の闘士だったという兵<sup>つわもの</sup>もいて、月に2回開かれる教授会は議論白熱、煙草の煙がもうもうと立ち込める（受動喫煙の害という意識などなかった時代だった）大会議室で、事の経緯が分かっていない私はその意義が理解できないまま、第2部の授業を休講にしてまで延々と続く議論に咂然としながら耳を傾けたこともある。また、興奮のあまり手に持っていたお茶を床に撒き散らし、ゴミ箱を蹴飛ばして、年長の先生から「コラッ」と叱られながら、大会議室をプイッと出ていかれた先生もいた。教育施行法の改正によって教授会権限が奪われた今となっては、こうした状況はあまりに野蛮で、時間の無駄と思う人もあるかも知れない。しかしこのような議論の場にいたお陰で、知らず知らずの内に大学全体の動きや各部署の役割、問題点などが理解され、普段は接触の機会を持たない他学科の先生方の考え方や人間性に触れることができたのは確かだ。問題案件が議論される度に先生方が口々に言われたのは「外大は風通しの良い大学（のはず）だ」という言葉で、そこには大学の意思の最高決定機

関である教授会への期待と信頼、自分もまたその教授会の一員だという自覚や誇りが感じられた。とにかく個性的な先生が多く、そうあることが許された面白い時代でもあったと思う。

着任時にはすでに今の学園都市キャンパスに移転していたが、かつて校舎のあった楠ヶ丘は実家の近くだったにもかかわらず、外大のことはほとんど知らなかったし、知り合いもないままに着任した。出身校の助教授から、着任したら個人研究室に閉じこもらずに、時々は学科の部屋に行って他の先生方と交流するようにと言われていたので、何度か覗きに行ってみたものの、共同研究室はいつもガランとして先生方が集まって何かをしている形跡は全くなかった。夜間の授業もある英米学科では、教員の出講時間もバラバラで、あらゆることが個人の裁量に任されていた。ある意味で自由なその雰囲気は、相談する相手のない着任当初は突き放されたように感じもしたが、信頼できる先輩や同僚との出会いを経て、むしろ心地よく感じられるようになっていったし、自己裁量の背後に潜む暗黙のルールのようなものが、学科としてのまとまりや規律をきちんと生み出していることも理解するようになった。

着任後早い時期に起こった採用人事は、学科としての英米学科の基本的なあり方を明らかにするものだったと思う。着任間もない私自身は業績審査に加わらなかったが、学科会議でなされた審査報告からは、出身大学や学閥など是一切関係なく、真摯に業績を読んで評価した結果であることが伝わったし、それ以上に報告者の先生方の深い学識も感じられ、私は良いところに来たと思つづく嬉しく思ったものだ。個々人の自由と責任に多くを委ねる姿勢は、教員間の関係のみならず、学生に対する外大の教育方針の重要な部分でもある。外大で学んだ中で一番印象深いのは *diversity* の考え方だと言ったゼミ生がいたが、外大では学業はもとより、留学も課外活動も就職もほとんどの活動において、学生はまず自主的な取り組みを求められ、また学生自身がそれを望む場合も多く、その結果、実際に個性豊かで多様な学生が育っているようにも感じられる。

同じ英米学科で、同じ教員が教えているにもかかわらず、学部と第2部とで学生のカラーが大きく違っているのも興味深い。第2部には社会人の学生がいて、年齢も人生経験も異なる人々が互いに影響を与え合っていることもひとつの理由としてある。若い時に好きだった文学を定年になった今こそ本格的に勉強したいとか、看護師の仕事をしながら興味のある英語を学びたいという理由で入学してきた学生など、入学の動機も様々だったが、時には自分の親と同じぐらいの年齢の人々に教師として接する中で、私自身も学ぶことが多かった。

私は英文科で何を学ぶかを、入学して初めて知ったというようなうっかりした学生だったが、文学の面白さを実感させてくれる先生方に出会って大学院に進学

し、修士修了後、進路に迷っていた時にも思いがけない可能性を指し示していただいて、研究者の道を目指すことになった。前もって長いスパンの見通しを持ち、計画を立てて努力を重ねるのではなく、その時々の良い出合いに恵まれ、偶然の流れに身を任せてきた感が強い。中でも外大との出合いは最高の幸運だったと思う。良い同僚に恵まれて、研究においても教育や学務に関しても多くを教えられ、数々の学問的刺激を受けたし、自分にとって本当に面白いと思えることに知的に反応し、受け止めてくれる学生との日々の交流が、自身の教育や研究を後押ししてくれた。また様々な場面で教員の研究や教育を支えて下さる優秀な事務職員の方がいて、特に学生支援部長の期間は、そうした職員の方々の能力の高さと支えの大きさを強く実感させられた。学会でも多くの研究者との良い出合いがあり、お陰で自分の研究の幅も格段に広がったが、それも神戸市外国語大学のスタッフ全体に対する学会の信頼と評価に支えられてのことだと有り難く思っている。

この春からこれもまた外大での縁がきっかけとなって、思いがけず岡山のノートルダム清心女子大学で教鞭をとることになった。ここでもすでに数多くの同僚の先生方や気持ちの良い学生との出合いの幸福を実感している。ハナミズキやライラックが咲き乱れるいかにも女子大らしい美しい学舎で、外大での経験も活かしながら、35年間の外大とはまた違う素晴らしい出合いに恵まれることを期待して胸をふくらませている。